

取材のお願い

2023年度「国際交流基金賞」受賞記念講演会

10月20日 ペルー日系人協会（於：国際交流基金本部）、11月14日 小川洋子氏（於：日比谷図書文化館）、12月11日 宮城聡氏（於：NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]）

国際交流基金（JF）は、学術や芸術などのさまざまな文化活動を通じて、日本と海外の相互理解促進に顕著な貢献のあった個人または団体に対し「国際交流基金賞」を授与しています。設立の翌年の1973年から実施している本賞は、今年で50周年を迎えます。

2023年7月26日付で発表しました通り、第50回の授賞となる今年度の受賞者が、宮城聡氏、小川洋子氏、ペルー日系人協会に決定しましたことをもちまして、2023年10月20日（金）、11月14日（火）、12月11日（月）に、受賞者それぞれが登壇する「受賞記念講演会」を一般公開で開催します。

記

講演会概要（実施日順）：

ペルー日系人協会 受賞記念講演会 「ペルーにおける日系社会の歴史」

日時： 2023年10月20日（金） 18時30分～20時（18時開場）

会場： 国際交流基金（JF）本部 ホールさくら

使用言語：日本語・スペイン語（逐次通訳つき）

主催： 独立行政法人国際交流基金（JF）

概要：

本年は、日秘国交樹立から150周年を迎えます。1899年、移民船第1船の佐倉丸で790人の最初の移民者がペルーのカヤオ港に降り立ちました。それから124年、ペルーの日系人は今や10万人を超え、世界で3番目の規模を誇っています。その日系社会の存在は、今では日本とペルーとの交流においても重要な役割を果たしています。

今日に至るまで、日系移民とその子孫は如何にしてペルー社会に溶け込んでこられたのか。また、さまざまな苦難をどのように乗り越えられてきたのか、そして現代において日系社会が果たしている役割は何か。ペルーにおける日系社会の歴史を振り返ります。



©APJ

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

小川洋子氏 受賞記念**小川洋子氏・尾崎真理子氏 対談「祈りの記憶を刻む」**

日時： 2023年11月14日（火） 18時30分～20時（18時開場）

会場： 日比谷図書文化館 館内地下1階 日比谷コンベンションホール

使用言語：日本語

主催： 独立行政法人国際交流基金（JF）

概要：

本対談の演題（「祈りの記憶を刻む」）には、「言葉を残さぬままこの世を去った、死者自身の記憶を物語にして現世に刻む」という意味と、「生きている者に残る死者の記憶を言葉にすることで、その死を刻む」という意味が、二重に含まれています。

「小説を書いたり読んだりする行為は、死と生を行き来すること」。

こう語る作者の思いや実感を、『博士の愛した数式』や『密やかな結晶』など、海外でも広く浸透してきたいくつかの長編作品を取り上げながら、紐解きます。

対談登壇者：尾崎真理子氏（文芸評論家）

読売新聞東京本社において、編集委員・文化部長を歴任したのち、早稲田大学文学学術院教授を務めた。2016年度日本記者クラブ賞を受賞。

また、著書『ひみつの王国 評伝石井桃子』（2013年、新潮社）では芸術選奨文部科学大臣賞と新田次郎文学賞を、『大江健三郎の「義」』（2022年、講談社）では読売文学賞を受賞した。



© 講談社

**宮城聡氏 受賞記念****宮城聡氏・宮城嶋遥加氏 対談「演劇が国境を超えとはどういうことか」**

日時： 2023年12月11日（月） 18時30分～20時30分（18時開場）

会場： NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]

使用言語：日本語

主催： 独立行政法人国際交流基金（JF）

共催： 株式会社 NTT ArtTechnology

概要：

聞き手に舞台俳優・宮城嶋遥加氏を迎え、宮城氏がソロパフォーマンスから“二人一役”へと進んだ遍歴を振り返りながら、西洋演劇と伝統演劇の混淆をどう捉えているか、また文化における「民族のオリジナリティ」の問題など、自らの創作の背後にある思想や演劇的テクニックについて語り尽くします。また、従来最もアナログな表現と目されていた舞台芸術が今後デジタル技術になにを期待しているかについて展望を語ります。

対談登壇者：宮城嶋遥加氏（舞台俳優）

東京大学大学院総合文化研究科修士課程を宮城聡の演劇実践に関する論文で修了。主演作品に SPAC『ロミオとジュリエット』、静岡県文化プログラム『かぐや姫、霊峰に帰る』、馬術演劇『Lunar Comet』など。宮城聡演出作品では『アンティゴネ』『マハーバーラタ』『イナバとナバホの白兔』『夜叉ヶ池』などに出演。学術と実践両方の立場から演劇を探究した経験を活かし、さまざまな活動を展開している。



© Ryota Atarashi



© NAKAO Eiji

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp



2023（令和5）年度 国際交流基金賞 受賞者

■宮城 聡

（演出家／SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督・静岡県コンベンションアーツセンター館長）【日本】

MIYAGI Satoshi

（Stage Director／General Artistic Director of Shizuoka Performing Arts Center）[Japan]



© Ryota Atarashi

【授賞理由】

SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督を務める宮城聡氏は、身体と言葉と音楽が一体となった独自の手法で祝祭的な舞台空間を創り出し、世界的に評価の高い舞台芸術の演出家だ。

1959年東京に生まれた宮城氏は、大学で演劇論を学び、1990年に「ク・ナウカ」を旗揚げする。演出の特徴は、主な登場人物が「語る」俳優＝speakerと「動く」俳優＝moverに分かれており二人一役で演じられる点だ。座ったまま台詞を語る俳優と無表情で文楽人形のように動く俳優の、極度に抑制され純化され

たエネルギーが舞台上で交錯するときに生まれる、日常を超えた独特のダイナミズムで、シェイクスピアから三島由紀夫まで幅広いレパートリーを上演。2007年にSPAC芸術総監督に就任。自作の上演と並行して世界各地から現代社会を鋭く切り取った作品を招聘する演劇祭を開催するなど、「世界を見る窓」としての劇場づくりにも力を注いでいる。2018年芸術選奨文部科学大臣賞（演劇部門）受賞、2019年フランス芸術文化勲章シュヴァリエ受章。

宮城氏は、海外公演をク・ナウカ時代から積極的に行ってきたが、大きな注目を集めたのは2014年のアヴィニョン演劇祭石切場で上演されたインド叙事詩『マハーバーラタ ～ナラ王の冒険～』と、2017年同演劇祭法王庁中庭でアジア圏の劇団が歴史上初めてオープニングを飾ったギリシャ悲劇『アンティゴネ』だろう。同時代的テキスト解釈とアジア演劇の身体技法や様式性を融合させた演出は高い評価を受けた。2018年にはフランス、コリーヌ国立劇場の委嘱により同劇場でL・ミアノ作『顕れ』を発表、またパリでのジャポニスム2018で『マハーバーラタ ～ナラ王の冒険～』を上演。米国で実施したJapan 2019では、ニューヨークで『アンティゴネ』を上演し一万人以上の観客を動員。2022年にはベルリン国立歌劇場でモーツァルトのオペラ『ポントの王ミトリダーテ』を演出するなど、現在世界から注目を集める日本の演出家の一人と言って良いだろう。

このように長年にわたり舞台芸術を通じた国際相互理解の推進に貢献してきており、今後ますますの活躍を期待して国際交流基金賞を授与する。



© Stephanie Berger

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

■小川 洋子（小説家）【日本】
OGAWA Yoko（Novelist）[Japan]**【授賞理由】**

小川洋子氏は1988年に文芸誌の新人賞を受けてデビューし、3年後、『妊娠カレンダー』の芥川賞受賞を機に日本国内で広範な読者を得た。以降30余年に及ぶたゆまぬ創作活動によって、すぐれた長編、短編を次々に生み出し、『博士の愛した数式』（2004年、読売文学賞）『ミーナの行進』（2006年、谷崎潤一郎賞）『小箱』（2020年、野間文芸賞）などの受賞歴を誇る。

「『アンネの日記』を読んだことで作家になった」。そう意識してきたという小川氏の作品世界は、死者の記憶に刻まれた過去の時間のように静かな、閉ざされた空間であることが多い。登場人物たちは、そこで失われゆく記憶や命と向き合い、奇妙な遺物を大切に、慈しんで弔う。死はすべての人々に平等だとの思想に貫かれた物語には、科学技術によって合理化される現代社会への警鐘も低く響く。



© 講談社

端正な日本語で書かれた小川作品は、言語や国境の壁を越えて共感を呼び覚ます、普遍的な力があると直感する研究者、翻訳者らは次第に増え、2000年代に入ると欧米各国で急速に紹介が進んだ。とくにフランス語版の読者が多く、これまでに27作が訳され、『薬指の標本』は2005年にフランスで映画化もされている。近年は台湾、中国、韓国などアジア諸国への広がりもめざましく、2023年半ばまでに36作品(共著を含めると39作品)が合わせて37の言語に翻訳され、海外で本になった。

『博士の愛した数式』『密やかな結晶』『ホテル・アイリス』はとりわけ多くの国で読まれ、評価が高い。このなかの『密やかな結晶』は、いつしか記憶まで消されていくディストピアを描いた長編だが、英語版が2019年に出るとイギリスのブッカー国際賞、全米図書賞・翻訳文学部門が最終候補として選出。小川氏が現代文学の第一線に位置する作家であることを証明した。

世界各地の読者だけでなく、いまや後に続く日本語作家、さらには日本語教育に携わる人々を牽引し、激励する存在である小川洋子氏。文学や日本語を通じた国際相互理解の推進に大きく貢献してきており、今後ますますの活躍を期待して国際交流基金賞を授与する。



翻訳者の Rose-Marie MAKINO FAYOLLE 氏と

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

■ペルー日系人協会【ペルー】

Peruvian Japanese Association / Asociación Peruano Japonesa (APJ) [Peru]



©APJ

【授賞理由】

これまで在米やブラジルの日系人については、情報や交流が多く日本社会に広く知られる存在であったが、10万人を超える規模を有するペルーの日系人についての知見は比較的少なかった。ペルーにおいて日系の大統領が誕生した近年の歴史を思い起こせば、ペルー社会において日系人がいかに定着し活躍してきたかを再認識することができる。日ペルー国交樹立から今年で150周年、移住開始から124年、その中であってペルー日系人コミュニティを長年支えてきたペルー日系人協会（APJ）の存在を忘れてはならない。

同協会は1917年の創設以来、日系人の相互扶助に努めるとともに、ペルー社会への定着を促進してきた。日本語教育は協会創設以前の1908年には早くも移住者の子弟のために始まっていたが、戦争中は日系人の活動が制限された。同協会の日秘文化会館を中心に日本語教育がペルー社会に浸透していったのは、戦後、それも近年になって、日本のマンガやアニメなどポップカルチャーが世界的に注目を浴びてから特に著しい。同協会は、2015年に南米スペイン語圏9か国の日本語教育の連絡機関である「南米スペイン語圏日本語教育会議」を立ち上げるなど、今や南米における日本語教育のハブとしても活躍している。

また、同協会はペルー日系社会最大の文化施設ともいえる日秘文化会館を有し、コンサート、演劇、展示会、会議などの文化活動の中心的存在となっている。加えて、日本の古典文学の翻訳出版や中南米諸国の日系人対話をリードするなど、日本研究と国際対話にも積極的である。同会館内美術館には日本人移民の歴史も常設展示されている。注目すべきことに、同協会は医療サービスの分野でも社会に貢献している。1981年に開設された日秘総合診療所は、年間100万人の利用者があり、また、日系人移民100周年を記念して2005年に開設された日秘百周年記念病院にも一日に1,000人の外来患者があるという。



©APJ

以上のような多くの理由から、日ペルー150周年を迎えた記念の年に、ペルー日系人協会に国際交流基金賞を授与することはきわめて時宜にかなっている。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp